ボランティア日本語教師の異文化適応と成長
ーシニア世代の地域ボランティアの場合ー

髙﨑　三千代

要 旨

今日の日本語教育がボランティアに負う部分は大きい。本調査は、地域日本語教室を参与観察し、ボランティア教師の中心であるシニア世代が異文化にどのように対峙し、成長の手掛かりを得ていくかを考察しようとしたものである。

8ヶ月 55 時間の教室観察と、ボランティア教師と学習者へのインタビューを資料とした分析の結果、シニア世代のボランティア教師は、それまでの所属社会での影響を大きく残して日本語教室に参加していることが分かった。したがって、ボランティア教師にとって、外国人学習者だけでなく日本語教室も異文化であると予測される。

また、ボランティアー学習者関係が上下関係に似ているとき、ボランティア教師が異文化に気づかないまま授業が進んでいく様子が観察された。

【キーワード】　ボランティア　地域の日本語教育　異文化

1．はじめに

1970 年代以降の日本語学習を必要とする外国人の量的増加と多様化は、日本語教授に関わる人々の増加・多様化ももたらしている。とりわけ、職業としての日本語教師でなくボランティア活動を基本に、主として居住地域の外国人の日本語学習や生活を支援する個人・組織の増加がめざましい。1999 年度の文化庁の調査では、日本国内の日本語教員総数(23048 人)のうち、57.5%(13264 人)がボランティアであり、施設別に見ると、大学等高等教育機関以外の機関･施設の日本語教師は、その 62.7%(12026 人)が地域ボランティアとなっている。

この 30 年間の日本語教育への施策として 1985 年、文化庁の「日本語教員に求められる資質と能力」では、日本語教育の標準的内容が定められた。次いで 2000 年 3 月には「日本語教員のための教員養成について」で、多様な学習需要や活動の場の拡大に対応することが強調された。その中には「異文化接触」「異文化コミュニケーションと

社会」「異文化理解と心理」のように「異文化」に続く項目が多く取り入れられており、現在の日本語教員養成における重要課題の一つであることが推測される。

2．研究課題

上に述べた通り今日の日本語教育がボランティアに依存する部分は大きく、彼らの成長は職業としての教師同様に重要である。一方、考慮すべきボランティアの特性もある。ボランティアは、自ら進んで活動を始めた責任感のために他者の期待を重く受け取ったり、自分を追い込む可能性がある。あるいは逆に、自分に返ってくるものが予想外に暖かく大きければ、その活動を継続したり積極さを増す力を得ることもある。ボランティアは、活動の力を相手に依存するという点で精神的、物理的に不安定であるといえるかもしれない。

これまでボランティア日本語教育については、グループ・団体による活動報告書やケース・スタディ、教授現場の微視的研究などが見られるが、ボランティア個人の教授者としての変化・成長に注目したものは多くない。本稿では、今日の日本語教員養成の課題の一つである異文化面について、ボランティア日本語教師の意識に焦点を当てたい。特に、日本語教育以外の所属社会での経験が長かったシニア世代の一ケースに絞り考察する。

3．先行研究

ボランティアの定義については諸説あるが、文部省(1992 当時)の生涯学習審議会答申(1992)では、「個人の自由意思」と「社会貢献」と述べている。金子(1992)は、ボランティアが「自発性」と「上下・利害関係でなく相互依存的関係」から活動の力を得ている点を強調している。総理府「社会意識に関する世論調査」によると、「国や社会のことにもっと目をむけるべきだ」と答えた人の割合は、1971 年の 38%から 1998 年の 48%へと上昇し、「日頃、社会の一員として、何か社会の役に立ちたい」と思う人の割合も 1977 年の 45%から 1998 年の 62%へと上昇している。このような、社会に貢献したいという意識の変化が、ボランティア参加者の増加となっているといえよう。

日本語教育では、尾崎(1998) が、日本語ボランティア教師について「日本語習得を助けるための意図的参加」と「無償性」に特徴があるとしている。その活動について

は、日本語教育関係者から教授者とそのネットワークすなわち、教授者間、対学習者、対行政担当者、対専門家に関する研究が行なわれ(尾崎・富谷 1998 他)、学習者の動機、教師間の問題点、教室運営上の悩み等が明らかになっている。また、各地の在住外国人支援や国際交流事業の取り組みが、官民種々の団体からなされている。

ボランティア活動を支える人々の年代は多様であるが、比較的自由な時間を持っている定年退職者や子育てが一段落した人たちは、有力な担い手であろう。今回取り上げた日本語教室でも、この年代の人々は欠くことができない存在であった。彼らは、それぞれこれまでの人生で多くの時間を費やしてきた仕事による経験を蓄積しており、これから社会経験を積もうとする世代と区別する意味で、ここではシニア世代と呼ぶ(注 1)。

以上を参考に、本稿ではボランティア日本語教師を「日本語学習を必要とする人々を自発的に支援する人々」とし、その中でもシニア世代の人を取り上げる。

G・H・ミードは、われわれは他者とのやり取りのなかで期待される像に一方的に同調するのではなく、こうありたい自己との両者が調節をして自己が成立すると考える。それを内面化する作業を積み重ねて自分への役割期待を総合し一般化しながら、社会の一員としてふさわしい価値体系を形成していくとする。長年かかって身に付けた自己像や役割は、その中では自然なものとして身に染みついていると考えられる。

日本語教室は、外国人学習者を対象とする点で異文化に接触する場である。これまでの所属社会での長い経験を身に付けたシニア世代のボランティア教師が参加するとき、日本語教室そのものもこれまでの経験・環境・価値観等が異なる異文化に映るのではないだろうか。

4. 研究方法

本考察は、エスノグラフィーとインタビューによる。エスノグラフィーは、東京近郊 X 市の初級日本語教室で、2000 年 5 月から 2001 年 2 月に実施された 66 時間の授業時間のうち 50 時間の観察を行なったものである。初めの 38 時間は完全観察であったが、その後の 12 時間はボランティア教師として授業に参加した。1 回 2 時間の授業中、教室となる室内では 4 つのクラス（外見上は長机を寄せたグループ）が同時進行していたので、各クラス約 30 分、学習者の斜め後ろで声が聞き取れる位置間を移動して教師と学習者のやり取りを観察した。授業は録画・録音せずメモを取り、帰宅後整

理した。授業のほかに2回計2.5時間の教師打ち合わせ会、3時間の外部講師による講演会に参加した。

インタビューは、先の4つのクラスのボランティア教師のうちA、B、C氏に行なった。インタビュー時間はB、C両氏は約2時間、A氏約3時間で、参加の動機、日本語教育受講経験、活動についての感想などを半構造的に質問した。A、B両氏のクラスの学習者2名にも約1時間半ずつインタビューした。インタビューの録音が許可されたのはA氏と学習者2名の計3名であった。本稿で報告するのはそのうちのA氏である。

分析の方法は、観察ノートの記録とインタビューを文字化したものをBogdan&Biklen(1992)によって分類し、それらから見出されるキーワードによってカテゴリー化した。

5. 結果

5-1 X市日本語初級教室(注2)の特徴

X市国際交流協会は1年間の日本語教師養成講座を主催している。大学講師によるこの講座を修了すると、1年間アシスタントとして授業を見学・補助し、その後ボランティア教師として教室に参加できる。この講座、あるいは大学・日本語学校等での養成講座を50時間以上受講していることが教師資格として求められ、参加以降もボランティア教師会によって組まれている月1回の講習会への出席が奨励される。講習会のテーマは「使役の教え方」「自動詞・他動詞の教え方」など、初級授業に直結したものであった。このような点から、X市の日本語教室は日本語教育志向の教室であると判断できよう。

授業の進め方も明確に定められている。日本語教室の1年は3学期制で、新規学習者は8段階のいずれかのクラスで受講を始める。週1回の授業は市販の教科書を用いて予め決められた進度に沿って進められ、学習歴が全くない学習者も、最長8学期(2年8ヶ月)で初級教科書2冊を終えて修了する。しかし、学習者には中途帰国、仕事の多忙などの継続困難な要因もあり、交流協会の調査によれば修了する率は約9%である。

5-2 リタイア後の生活とボランティア

A氏は、会社勤めを定年で終えてから、X市の日本語教室に参加した。このボランティア活動のほかに、留学生を近郊の史跡に個人的に案内するのを生活の楽しみにし

ている。

ボランティア教師を始めた理由について、A氏は終戦後に経験した若いアメリカ人との交流を語った。戦争中、外国の情報も外国人との接触もなかったA氏であったが、終戦を迎え会社員になり、勤め帰りの酒場で駐留軍の同年代アメリカ兵と言葉を交わすようになったということである。A氏が習った英語は文法中心で話すほうは不得手だったけれど、身振り手振りとお互いの片言で話し、なじみの店に案内し合うまでになった。これが大変楽しかったというのである。この経験は40年以上経過しても記憶されており、A氏にとって異文化交流の原体験といえるだろう。

その後の会社勤めの間、A氏は人に話を聞かせたり教えたりすることが好きだったそうである。定年が近づきその後の生活を考えた時、ボランティア日本語教師なら会社勤務での人を教える経験が生かせ、外国人との交流もできる。退職後には海外旅行をする機会もできるだろうから、英語を話すのにも役立つかもしれないと考え、A氏は退職の1年前から計画的に準備した。日本語教師の資格の一つとされる420時間の養成講座を通信教育で受講した。420時間は、多くの同僚ボランティア教師が受講するX市主催の養成講座よりも長い。受講をほぼ終えた翌年の3月に市のボランティア日本語教師に応募し、5月に協会から連絡が来て活動を開始した。それ以来3年9ヶ月の経験になる。

5-3 授業スタイル

X市の日本語教室は、教科書と進度は決められていたが、授業の構成は各クラスのボランティア教師に任せられていた。A氏は、2時間の授業をほぼ以下の手順で進めた。学習者は、学期によって3名～6名だった。

① 学習者が揃うまでA氏による話

② A氏が当日学習する文型を板書

③ A氏が教科書にある文型の欄を模範音読

④ A氏が文型の欄の文について説明

⑤ A氏の指名により、学習者が文型の欄を音読

⑥ A氏が教科書の練習問題を一題ずつ模範音読した後、指名により学習者が音読、解答する。

授業前と授業中に、A氏はさまざまな話をした。授業前には学習者の出身国の交通機関、風俗等、授業中は新文型の導入として上司への言葉使いの注意点、女性の社会

進出についての意見、日本庭園の名所、クリスマス等の日本事情の話である。学習者はその間A氏に注目していたが、聞き手の役割が定着し声を出す機会はほぼ教科書の音読に限られた。A氏は教科書の音読だけでなく例文の説明時も教科書を見ていたので、学習者も教科書を注視し、両者のアイ・コンタクトは激減した。

学期途中から参加した学習者１名は、当初、A氏の話の途中に質問を挟むことがあったが、その後、アシスタントが隣りに座り、個別に応じるようになった。

A氏は、ボランティア日本語教師を始めてからの感想を「おおむね予想していたのと同じだった。」と答えている。自分の英語学習は文法中心で話すことが不得手だったけれども後にアメリカ人と片言で会話して楽しかったという経験を持っているが、教える立場に立つと、養成講座で学んだ教授法等の知識よりも自分の英語学習の経験を、より多く反映したと思わせるスタイルが続いていた。

5-4　表面化しない異文化

クラスには、会話が得意な学習者と読み書きが得意な学習者が混在した。タイプの異なる学習者が混在するクラスをどう運営するかは、日本語教師にとって教授技術と異文化面の問題解決力を養成する機会となると考えられるが、A氏は「この教室は永住あるいは長期滞在の外国人の生活支援を優先する」として読み書き第一の方針を貫いた。

「読み書きができないと、日本に永住したりずっと仕事をする生徒と１、２年で帰国する生徒が調和しない。」

「まずいちばんの基礎はひらがな・かたかな。読み書きはだいじで小学校の教科書が読めるぐらいではないと(困る)。会話ができればいいのではないね。ａさんはよく読めるし、ノートを用意してこちらが板書したことを写している。ｂさんは話せても読めない。字を覚えないから苦労している。」

しかし、実際には学習者のニーズは正しく把握されていなかった。このクラスの学習者２名は、ともに教科書はすでに最後まで独習したが日常会話に困っているとインタビューで語っている。

「本は（独学で）全部読みました。読むことと話すことは違います。」

「(困っていることは）美容院で説明できないので行けないこと。近所の奥さんに会うとき、挨拶はできます。もっと何を話しますか。話せません。」

「友達は〇〇日本語学校に行きます。（そこは有料か＝筆者の問い）はい、お金を

払います。私は行きません。」

外国人との交流をしたいと始めたボランティアであったが、学習者とA氏の関係は職場の上下関係にも似て学習者から授業への要望を言い出しにくく、A氏には学習者との学習観やニーズの違いが見えにくい。有料の日本語学校へ通えないためこのボランティア教室に通っている学習者がいること、そうした学習者に依存して授業が成立していることにもA氏は気づいていなかった。

5−5 漢字教材の自作に学習者のニーズ発見

A氏は、観察したクラスのほかに昼間の漢字クラスを担当していた。漢字クラスは新しく始まったクラスで、教科書や授業の進め方が確定していなかった。A氏はそのクラス担当を打診され、最初は不安を覚えながらも引き受け、このクラスのための教材研究や教材作成を通して日本文化を学び直したことを喜んでいる。さらに、自作教材が学習者に喜ばれることで意欲が高められている。

「今度は漢字をやるってんで『漢字をやる先生はいませんか』ってことで。でも僕も漢字をやるのも自信もなかったし。でも漢字も必要あるかなっていう。まあ、しながら自分の勉強になるし、何の教科書を使っていいかも分からなくて専門の書店に行ってね。いろいろ見て意見聞いて、○○（教室で使用中の教科書）に基づいた漢字練習帳っていうのがあって、それがいいんじゃないかってことでそれを使ってるんですよ。」

「日本語を教えることは日本語を見直すという面で自分のためにもなり、知的なところが楽しみでもある。漢字のクラスではプリントを作るんだけどね。」

「漢字になると、僕は３つやってるクラスの中で漢字（クラス）が一番資料を作る。で、教材なんかを刷ってもっていったりすることもあるんですけどね。そういうのがあると、僕の感じだけれど（学習者は）喜ぶっていうかね。教科書にないことが出ていろいろと知識として出てくるからね。」

A氏が担当を承諾した功績で、漢字クラスが常設になり市報で生徒募集されたこともA氏を力づけた。

「今まで試行的にやってたけどきちんとやろうということになって、この３学期の募集から（市報に）載せたんですよ。だんだんと認知されつつあると。」

5 - 6　日本語教室の仕事分担

観察期間中、学習者の欠席が続き、日によってボランティア教師２名、学習者１名

という日があった。これについてA氏は、学習者のニーズが汲み上げられていないためだと思い「交流協会にアンケートなりをやるように言った」ということである。欠席する場合には学習者が自発的に連絡すべきであり、A氏自身が近況伺いや出席を促す電話をかけたことはない。

A氏が挙げた問題点は、曜日によってボランティア教師が足りないこと、教師の入れ替わりが激しいこと、教室の確保である。A氏は2日以上クラスを受け持ち、増設の漢字クラスを担当する等の協力をする一方、教室の予約のために役所に出向くことは担当外と把握しているらしく「あれは大変で、もうしない」ということである。**「協力できることは協力し、ニーズ調査など交流協会がすべきだと思うことは要請する。自分で望んでやっているから負担になるということはないね。」**

実際には、A氏自身が授業中の学習者の発話や顔色から漢字クラスのニーズを理解している。このように、授業担当者も対策を立てることは可能であろう。職務分担の意識は会社経験によるものか、あるいはボランティアの自発性として活動の上限を自ら引いたとも考えられるが、以前の社会での約束事が通用しないため、この場での参入の仕方を他の参加者と調整し合っていることが観察される。

5−7 遠くなった異文化

A氏の発言から異文化という単語やそれに関する発言は聞かれなかった。それで異文化理解について考えるところを尋ねたところ、A氏はこの日本語教室以外を話題にした。A氏のなかでは教室の活動は異文化理解に直結して意識されていないようであった。

「日本人は金だけ出して汗を流さないという批判がある。アジアの人に対して一段上の態度だと言われるし、自分なりにそれを分かる。これからはそうであってはならないということを知ってもらい、理解してくれる人を草の根レベルで増やしていくということだね。」

「そういう意味で（日本語のボランティアとは別に個人的に）、この辺りの日本的な所に留学生を連れて行っているんだけどね。」

6．考察

A氏のボランティア参加までの計画性は、ボランティア教師への高い意欲の表われであろう。動機は、若い頃の英語での片言のやり取りの原体験に加え、社会経験を生

かすことができ外国旅行の楽しみを増幅できるという期待にもあった。

A氏の授業は、読み書きとA氏自身の話や説明が中心で、A氏の受けた英語教育と職場での役割が想像された。読み書きよりも会話がやりたい学習者への対応、あるいは両者の混在するクラスの運営は、A氏が異文化を意識する場面であろうと思われたが、ボランティア教師－学習者の関係が「教える人」と「習う人」の関係で授業が進められたので、学習者とのやり取りは、音読と教科書上の質問－応答が占めていた。授業は、このような形式をを好む学習者か、希望はあってもそれを表明しない学習者によって継続された。A 氏が異文化を意識するのは、教室外での「名所案内」という交流だった。

日本語教室の運営では、予想外の仕事をして勝手が違うように感じていた。このもう一つの異文化に対しては「協力すべきことは協力し協会がすべきことは要請する」というA氏なりの解釈と他参加者との調整が見られた。

A氏の自発性が発揮され成長が期待できる場面もある。漢字の授業で作成したプリントは、A氏自身の勉強にもなり学習者にも好評であったという。学習者に喜ばれたことを契機に、学習者の声を聞きやり取りを重ねれば、日本語教室の中で異文化を発見することにもつながるのではないだろうか。

A氏のこれまでの経験を生かすにはどうすればよいだろうか。夜の日本語教室に通う学習者の多くは昼間に仕事を持っている。日本の会社社会に参画するのに必要な日本語を教えるにはA氏のようなボランティアが最適である。ニーズ調査もよいが、A氏自身が持っている日本語学習者のイメージからいったん離れて、学習者とのやり取りから希望を聞き出すことがきっかけになるだろう。会社人としては教える一方であったかもしれないが、「異文化」をよりいっそう自分に近いものにする上で、相手に語らせることはA氏にとって重要かもしれない。

7.　おわりに

A氏はボランティア教師になったとき、それ以前の所属社会での役割期待や振る舞い、自分の学習体験が身に染み付いていた。そこで慣れ親しんだ経験や習慣・価値観を維持してボランティア日本語教室という新しい社会に参入したため、A氏は学習者との関係を馴染みのある「教える人」と「習う人」と捉えた。そこでは、学習場面での異文化がA氏に見えにくくなっていた。一方、A氏は、日本語教室の運営の仕方に異文化を感じ、摩擦を避けるために調整を行なっていた。

日本語教育全体の中でボランティア教師の存在が大きくなった現在、彼らの支援の重要性は論を待たず、日本語教員養成もその視点を考慮する必要があろう。そのためにはボランティア日本語教育についての量的調査と同時に、本事例のように個人の活動と成長を追う調査も重ねる必要があると思われる。

謝辞:長期に渡る授業観察とインタビューを快く許可くださったX市日本語教室に心からお礼申し上げます。

注

(1)「シニア」は一般に「年長者」を指すものが多い(『小学館国語辞典』等)。「シニア世代」として「積極的な生き方をする高齢者を肯定的に評した呼称(『カウンセリング辞典』)とするものもある。「シニア・ボランティア」という政府系ボランティア組織では、40 歳以上を参加資格としている。「シニア」あるいは「シニア世代」は、年代を厳密に規定するというよりも、ある程度年配で社会経験の豊富な世代をイメージした呼称であると考えられる。

(2) X 市に登録している外国籍市民は 1999 年に 6408 人となり、10 年前に比較し 2 倍以上に増加した。これら外国籍市民の日本語学習のニーズと、県主催の日本語教授ボランティア講座を修了したX市民が活動の場を求めたことから、1993 年同市の国際交流協会主催で初級日本語教室が開講された。1997 年から協会内に発足した日本語ボランティア教師会が実質的な運営を行なっている。教室の目的は、日本語が分からない人達が日本の生活になじみ、自分の考えを日本語で言えること、また教室活動を通じて国際交流の輪が広がることである。教室運営の他に、日本語教育担当の加配教員のいない市内の小・中学校 8 校に 11 名のボランティア派遣の活動も行なっている(2001 年 3 月現在)。ボランティア教師としての参加資格は本文中にある通り簡単なものではないが、人気は高く 2000 年 5 月の登録者は 96 名である。

観察を開始した 2000 年の 1 学期は、週に 6 日、31 のクラスで延べ 54 名のボランティア教師(週 2 日以上活動するボランティアもいる)、143 名の学習者、観察した曜日には夜間開講で 4 クラス、教師 8 名(男性 4 名、うち定年退職者 3 名、女性 4 名、うち主婦 2 名)、学習者 16 名でスタートした。

参考文献：

(1) 尾崎明人・富谷玲子ほか（1998）『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究－報告書－』平成9年度文化庁日本語教育研究委嘱

(2) 金子郁容（1992）『ボランティアもう一つの情報社会』岩波書店

(3) 経済企画庁編（2000）『平成12年度版国民生活白書 ボランティアが深める好縁』

(4) 文化庁(1999)『文化行政のあらまし 平成 11 年度国内の日本語教育の概要』http://www.bunka.go.jp/1/2/2E/H11/H11-1.html

(5) _____(2000)「日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議報告」『日本語教育のための教員養成について』

(6) ミード G.H.著 稲葉三千男、滝沢正樹、中野収訳（1973）『精神・自我・社会』pp164-176

(7) Bogdan, R.C.&Bilken, S.K.(1992) *Qualitative Research for Education.* pp170-176. Allen & Bacon

（神田外語大学留学生別科）

How Japanese Teaching Volunteers adapt and develop?
-In case of a senior aged volunteer serving in a local community-

TAKASAKI, Michiyo

Today, Japanese language teaching in Japan depend much on volunteers, moreover, mainly to senior aged of them.
This article reports how a senior aged volunteer serving for Japanese language teaching in a local community adapt himself and develop as a teacher.
The research consists of a participating-observation of classes for eight months and interviews with one senior aged teaching volunteer and students.
As findings, he began Japanese teaching maintaining his beliefs gained in his past, and because of voluntary spirit that characterize a volunteer activity, he sometimes hesitates to be positive in the activity. His interaction with learners and fellow volunteers in the community was not so much.
Senior aged volunteers seem to need to reconsider of gained beliefs in his past and to use them effectively, and furthermore, to draw out his voluntary spirit.

(Kanda University of International Studies)